



## 「ビッコリ温泉」

脚本：綾奈ゆにこ

セイマ-ト夕方／レジのアリババのところにヤマトが来る。

- アリババ 「いらっしやいませ〜……あ、ヤマト」  
ヤマト 「おつかれさま。あれ、アリババだけ？」  
アリババ 「フェニックスはバックヤード。牛若とジャックはまだ来てないよ」  
ヤマト 「そっか。一緒に帰ろうと思ったんだけど、ちょっと早く着きすぎちゃった」  
アリババ 「2階のイーティンで待ってる？」  
ヤマト 「うん、待ってる。その前に……店員さん、天チキーつお願いします」  
アリババ 「わかった」  
ヤマト 「アリババ握力ないから、最初はトング握るのも難しかったけど……  
すざい、ちゃんとカチカチ出来てる……！」  
アリババ 「カチカチ」

フェニックスが来て。

- フェニックス 「おや、ヤマト君いらっしやい」  
ヤマト 「副店長さん、こんにちは。今、アリババすざかったんですよ！  
天チキーの用意が今までで一番手際がよくて」  
フェニックス 「アリババ君、どんどん上達してるよね。あ、お客さんだよ。いらっしやいませー」  
アリババ 「いらっしやいませ〜……あ、」

牛若とジャックが来る。ずぶ濡れ。

- 牛若 「副店長…… (ぜえぜえ)」  
ジャック 「やべえ、やべえよ…… (ぜえぜえ)」  
ヤマト 「牛若、ジャック、ずぶ濡れたよ！」  
フェニックス 「どうしたの？」

ジャック 「裏山に、温泉が湧いちゃった！」

ヤマト 「ええ〜!？」

アリババ 「おんせん……？」

温泉施設／マリスとピーター来て。

マリス 「緊急事態と聞いたが……」

ピーター 「日帰りビックリ温泉!? こんなのがあった!？」

フェニックス 「マリス、ピーター君、いらっしやいませ〜」

ピーター 「うわ、出た！」

マリス 「フェニックス、どういうことが説明してくれ」

フェニックス 「ひとこと言うと、私の創造理力で温泉施設を作っちゃいました〜」

ピーター 「じゃないよ! 勝手にいいわけ? そもそもなんで温泉なんか湧いたの？」

フェニックス 「以前ヘラクライストを起動した際に、  
水脈がズレて温泉が湧きやすくなっていたみたいで」

ピーター 「なにそれ〜」

マリス 「商業利用の温泉を掘削許可証申請前に掘った場合、  
温泉法によって罰せられるが？」

フェニックス 「個人利用なので大丈夫です。山の所有者である田中のおばあさまも、  
地域の皆さんが自由に入れる温泉がいいわね〜って」

マリス 「ならばいいが……。セイマートを臨時休業する必要はあったか？」

フェニックス 「緊急事態だと思って、つい」

ピーター 「じゃあお仕事終わりですか? マリスさん、一緒に温泉入りましょう！」

マリス 「いや、私は……」

フェニックス 「どうぞどうぞ」

ピーター 「マリスさん、はやく〜！」

マリス 「……少しだけだ」

フェニックス 「ごゆっくり〜。——さて。君も入りに来たんですか? フッド君」

フッド、物陰から現れる。

フッド 「チッ……気づいてたのかよ」  
フェニックス 「のぞきは感心しませんよ？」  
フッド 「うっせー！ 勝手にこんな施設作りやがって。  
この温泉はな、俺が先に目えつけてたんだ！」  
フェニックス 「え？ さっき湧いたばかりなのに？」  
フッド 「さっき湧いてすぐ目えつけたんだよ！」  
フェニックス 「う〜ん、でも温泉は田中のおばあさまのものだし、  
そもそも君、予約でもしていたんですか？」  
フッド 「てめえ！ 天魔合神！」  
フェニックス 「相変わらず喧嘩っ早いですね……天聖合神！」

露天風呂／ヤマト、牛若、ジャック、アリババ。

ヤマト 「ふわ〜……露天風呂気持ちいいね」  
アリババ 「あつい……」  
牛若 「まだ1分もつかってないだろう」  
ジャック 「にしても、ビックリマン開封の儀の最中に温泉が湧くなんてな〜」  
ヤマト 「そうだったの？」  
牛若 「ああ。ヘラクライストのツノのまわりで儀式をしていたら、なぜか温泉が出た」  
ジャック 「キラシールは出なかった」  
ヤマト 「わあ……」  
ジャック 「副店長の創造理力って半端ねえな。こんな建物パーツで作っちゃって…  
…（思いついて）ビックリマンシールだって作れんじゃね!？」  
牛若 「は？」  
ジャック 「キラシールはもちろん、新しいシールも作れちゃうかも！」  
ヤマト 「新しいシール？」  
ジャック 「例えば、ヤマトたちのメイドンシールとか！  
この世にないシールも、創造理力を使えば——！」

×××

ヤマト (妄想) 「メイドン動使 (どうし) ♪」  
アリババ (妄想) 「メイドン……夢使 (むし) ……?」  
マリス (妄想) 「メイドンマリス♡」

×××

ジャック 「やべ、なんか混じった」  
ヤマト 「ジャック何考えたの?」  
牛若 「アホのことだから、どうせ邪 (よこしま) なことに決まってる」  
ジャック 「なんだよヨコシマって。牛若のエッチスケッチ八魔 (やま) オロチ〜!」  
牛若 「は!? 貴様のほうが!」  
アリババ 「(気づいて) ……何か来る」  
ヤマト 「え、どうしたのアリババ?」

上からフッドが落ちてくる。

フッド 「うおおおおおおお!」  
牛若 「上だ!」  
ヤマト 「え!?!」  
ジャック 「逃げろ〜〜!」

湯に落下するフッド。

フッド 「(湯から顔出して) ぶはっ——くっそ! ロココのやつ!」  
ヤマト 「ビックリした〜。フッド、なんで空から落ちてきたの?」  
フッド 「うっせ、ほっとけ」  
牛若 「副店長に吹っ飛ばされたか」  
ジャック 「え〜ヘッドロココ見たかった〜!」

そこへマリスとピーターも来る。

マリス 「騒がしいな」  
ピーター 「あ〜！ フッドお兄ちゃん、服のまま温泉入ってる〜いっけないんだ〜♪」  
牛若 「ピーター」  
ジャック 「マリスのおっさんまで」  
フッド 「入りたくて入ったんじゃないよ」  
ピーター 「じゃあさっさとどいてくれな〜い？ 僕、マリスさんと静かに入りたいんだ〜」  
フッド 「ハッ！ じゃあどかね〜」  
ピーター 「む〜！」  
ヤマト 「大丈夫、広いからみんなで入れるよ」  
アリババ 「大きいお風呂、楽しい……」  
ピーター 「(照れ) む……お風呂に楽しさなんて求めてないけどお〜……  
マリスさん、入りますか？」  
マリス 「そうだな」  
ピーター 「あ、ちょっと段差ある。マリスさん、手つなぎますか？」  
マリス 「大丈夫だ。なんとか……」  
ジャック 「ん？ マリスのおっさん、なんかぎこちなくね？」  
アリババ 「メガネが無い」  
牛若 「温泉では錆びるからな。外していても不思議じゃない」  
ヤマト 「マリスさん、葉っぱとか落ちてるので足元気をつけて下さい」  
マリス 「ああ。分かっ——あ」  
ヤマト・ピーター 「マリスさん！」

座敷／目を覚ますマリス。

マリス 「う……ここは……？」  
フェニックス 「気がつきましたか、マリス。  
露天風呂ですべて転んで、今はビックリ温泉の座敷です」  
マリス 「フェニックス……。うわ！」

フェニックス 「動かないで下さい。頭を打ったかもしれませんから」  
マリス 「だからといってこの状況はなんだ」  
フェニックス 「なにして、膝枕ですけど」  
マリス 「グウツ……（うめく）」

少し離れたテーブル。

ピーター 「フェニックスのやつ～～マリスさんに膝枕するなんてズルいよ。  
僕だってまだしたことないのに」  
牛若 「貴様の体格でヤツの頭は支えきれないだろう」  
ピーター 「やってみなくちゃ分からないでしょ！」  
ジャック 「まあまあ、天チキでも食べよピーター」  
ヤマト 「デビルまんも美味しいよ」  
ピーター 「デビルまんは食べたことあるけど、天チキって美味しいの？」  
牛若 「天使チキンは、セイマートになった今でも売り上げ上位の商品だ」  
アリババ 「どっちもおいしい……」  
ピーター 「ふ～ん、美味しくなかったら怒るからね。じゃあ……」

酒に酔って、少しご機嫌なフッドが天チキを取り上げる。

フッド 「食わね～なら俺が食う～」  
ピーター 「あ～！ フッドお兄ちゃんが取った！」  
ヤマト 「フッド～」  
フッド 「ああ？ 早いもん勝ちだろ～」  
牛若 「む。貴様、若干いつもと感じが違うかい？ 何を飲んでいる」  
フッド 「あ？ 酒」  
ヤマト 「お酒!？」  
ピーター 「うわ～不良～未成年飲酒～」  
フッド 「中国じゃ禁止されてね～んだな～」  
ジャック 「そうなんだ。え～……ちよつとなめていい？」

牛若 「ダメだ。ジャック貴様、ビックリ野育ちのビックリ野市民だろ」  
ジャック 「そうだけど！ 興味あるじゃん！」  
アリババ 「お酒……」  
ヤマト 「アリババも、お酒は二十歳（はたち）になってからだよ」  
アリババ 「はたち？」  
ヤマト 「あ、20歳のこと。誕生日もうすぐだねっ」  
アリババ 「もうすぐ……？」

フェニックスとマリス。

フェニックス 「フッド君、勝手にお酒なんて持ち込んで……  
あれ？ マリス、顔が赤いですよ。マリスまで飲んでないでしょうね」  
マリス 「だから顔をのぞき込むな……！ ぐう、もう耐えられん！」  
フェニックス 「起き上がっちゃダメですって」  
マリス 「いいや大丈夫だ、自分の身体のこと自分がよく分かっている。  
頭より何より心臓の方がだいぶ限界だということが！  
発汗が激しい……水分補給だ！」  
フッド 「おいマリス～、それ俺の酒～！」  
マリス 「(ぞくぞくぞく!) ……ふう……」  
牛若 「飲み切った……」  
フッド 「へえ！ 白酒（バイジュウ）一気飲みたあ、やるじゃねーかマリス～」  
アリババ 「バイジュウって？」  
フッド 「中国の酒。透明で水みてえだが、口に入れた瞬間ヤケドしたみてえに痛えぞ」  
ヤマト 「ええ!？」  
フェニックス 「大丈夫ですか？ マリス」  
マリス 「……。フェニックス」  
フェニックス 「はい」  
マリス 「……フェニックス」  
フェニックス 「マリス？ あの、目が据わっているというか、だいぶとろ～んって」  
マリス 「フェニックス！」

フェニックス 「は、はい」  
マリス 「前から言っておきたいことがあった。  
私は貴様のそういうところが……貴様のことが……」  
フェニックス 「私のことが……？」  
マリス 「貴様のことがス——」  
フェニックス 「ス……？」  
マリス 「ス……すう、すう（寝息）」  
ジャック 「おっさん寝た！」  
フェニックス 「なんだ、寝息か……ビックリさせないで下さい」  
牛若 「人騒がせな」  
ピーター 「僕、マリスさんに膝枕する！」  
フッド 「お～、頼むわ～」  
ピーター 「ちょっと！ 駄犬にじゃないんだけど!？」

そんな一同を見つつ、

アリババ 「お酒って、眠くなるんだ」  
ヤマト 「お酒はホロヨイくらいがちょうどいいって母さん言ってたっけ……」  
アリババ 「ホロヨイ？」  
ヤマト 「えっと、ちょっとだけなら楽しくなって、ふわ～って良い気持ちなんだって」  
アリババ 「温泉みたい……それなら飲んでみたい……けど……」  
ヤマト 「けど？」  
アリババ 「ヤマトと一緒にいい」  
ヤマト 「僕がお酒飲めるようになるの結構先だよ？」  
アリババ 「うん。待ってる」

END